希求像としての光明子

浅野則子

一　はじめに

万葉集の歌が歌われている時代に、確実に生きて、歴史の表面に現れた人物が、万葉集に歌を残している時、私達はその歌から人物の心を読みとろうとする。史書に現れない「心」が歌という形式になった時、それは読みとられることを求めているといえよう。それ故に、残された作品からは、その作者の発想を知るための、何らかの手がかりを求めようとするのが常であろう。しかしながら、作品が残されているといっても、それは、とらえようとする人物の歌にこめられた発想のすべてであるということはできない。当然のことながら、資料の「偏り」があるためであろう。それは、万葉集の編集が完全には、あきらかになっていないことからもわかるように、一つの方向ではなく、様々な編集の意図が万葉集の中にはあるからであろう。一般に、記録の「偏り」という点から、残されている歌のみで、人物を考えるのは、その一面をみるに過ぎないという否定的な考えがあるのも事実である。しかしながら、他の歌がのせられず、今、目の前に、残されている歌だけが万葉集に必要であったとしたら、逆にその「偏り」ということから何かを読みとることも又可能であろう。生きた時代、出自がはっきりしており、政治の場でも意味を持つ人物の歌として残されている万葉集の歌が見せる「偏り」とは、その人物を残されている歌によって固定しようとしているのではないだろうか。

天平の文化を花ひらかせた天皇、聖武の后として、政治の場にも姿を現す光明子という女性。政治は、天皇と皇后が併存して行うのがふさわしいという宣命がくだされて[注①]立后した藤原氏の女性である彼女はどのような歌を万葉集に残すのであろうか。光明子の歌から、彼女が万葉集中でどのように読みとられることを求められていたかを探っていこうとするのが小稿の目的である。

二

藤原不比等の娘、光明子は霊亀二年に入内し[注②]、神亀元年二月、聖武の即位とともに夫人になるが、天平元年八月十日に原則を無視し[注③]、皇族以外の女性として立后する。ここに藤原氏の力が及んでいたことは、明らかであるが、万葉集の中での光明子はどのような歌を歌う女として存在しているのだろうか。

光明子の歌とされるのは、万葉集では次の三首である。

①春日に神をまつる日に藤原太后の作らす歌一首
大船にま梶しじ貫きこの我子を唐国に遣る斎へ神たち
十九―四二四〇

②朝霧のたなびく田居に鳴く雁を留め得むかも我がやどの萩

右の一首の歌、吉野の宮に幸しし時に藤原皇后の作らせるなり。ただし年月、未だ審詳かならず。十月五日、河辺朝臣東人が伝誦せるなりとて云ふ。

十九―四二二四

③籐皇后、天皇に奉る御歌一首

我が背子と二人見ませばいくばくかこの降る雪の嬉しからまし

八―一六五八

夫、聖武は在位の期間も長く、[注4]その在位中は多くの出来事があったにも関わらず、皇后の歌の三首というのは、聖武の歌が十一首であることから考えても決して多くないというべきであろう。たしかに、聖武朝は、続日本紀にみる限り、漢詩が作られている場を多くみることができるが、[注5]その一方で、聖武は万葉集では、歌の伝統的な形に基づき、贈答もなしているのである。[注6]このあたりのことについては、触れたことがあるので詳述を避けたいが、聖武には女性にあてた恋歌があるばかりか、恋歌の表現にのっとり、桜井王という男性と贈答を交わしあうこともしており、[注7]歌そのものをよまないということはないのである。公的な場で漢詩が作られていたとしても、歌が歌われる機会が少ないという事実もまた、ないといってよいであろう。そのように見ていくと、今、万葉集に残されている多くはない数の光明子の歌は、光明子を歌の中の女性として残す物として意味があるのではないだろうか。具体的に歌を見ていこう。

光明子の歌のうち制作年代が明らかなものは、①の歌のみである。①は巻十九が年代順に並べられていることから考えると、天平勝宝三年（七五一）であり、題詞にあるように「入唐大使藤原清河」とは、その前年に拝命した甥の清河であることからも明らかになる。②に関しては「吉野の宮に幸しし時」とある。聖武の吉野離宮への行幸は神亀元年と天平八年の二回であるが、神亀元年では即位直後のために早すぎるとして天平八年とみるのが一般ではある。しかし天平八年の行幸は続日本紀によれば、六月二十七日から七月十三日となっており、歌われている「雁と萩」から考えると疑問を呈する説もあり、決定的ではない。

年代の明らかな①の歌からみていきたい。①の歌は、天平勝宝三年のもの。その前年に拝命した遣唐使は、第十回[注8]である。光明子は藤原一族の清河のために、「春日の神をまつる」日にこの歌を作っているとする。一族ということを強く意識して神を歌ったものに、大伴一族の女性、坂上郎女の祭神歌（巻三―三七九・八）がある。[注9]この歌は、光明子の歌とは異なり、一族が「神を祭る」時に歌ったという題詞があるように、特に、はっきりとした目的をもたず、その内容も「かくだにも　我は祈ひなむ　君に逢はじかも」と歌うように女の側の恋の成就というものである。坂上郎女にとって、「祭神歌」は左註によると「聊か」作ったとあるが、その内容から見て、当日、その場にいる大伴家の人々だれもが理解しうる内容としての「恋の成就」を歌うのである。ここで、坂上郎女は実体としての女ではなく、大伴家の「女」として歌っているといってもよいはずである。[注10]そして、このあり方は、光明子の場合も同じではないだろうか。氏神の前に集まった一族の前で、女は、神に向かい合う。そして、歌で光明子は、一族の神に対して、これから、唐に旅立つ清河を「斎へ」というのである。

光明子は、旅立つ者を送る立場で歌っていることはいうまでもないが、神に向かって「この我子」と歌うことに注目したい。実体の関係を超えて、この歌の中では、光明子は、清河をも「子」とする立場なのである。それは、歌の表現で、神に対して、藤原の一族を我がもとに引き寄せ、守る「母」であるといえよう。そして、その立場は、藤原の神に対しては、藤原の「母」という立場にいる光明子は、藤原の中心の女として歌っているのに他ならないのではないだろうか。

さらに、旅に出る男を待つ立場の女が神に祈る歌は万葉集中、比較

的、多くの例を見ることが出来るが、それらの歌に共通するのは歌う女は、自らのいる場所こそが、旅に出た男が戻ってくる場所としていることであろう。先に見た、坂上郎女も、光明子同様、甥である家持の旅立ちに際して歌っている。

④草枕旅行く君を幸くあれと斎瓮すゑつ吾が床の辺に
⑤今のごと恋しく君が思ほへばいかにかもせむするすべのなさ

十七―三九二七～八

この歌は「大伴宿称家持、閏七月に越中国の守に任けらえ、即ち七月を以ちて任所に赴く。時に、姑大伴氏坂上郎女の、家持に贈れる歌二首」[注11]という題詞がついているが、そこで「守」となった家持に姑の「大伴氏」の坂上郎女が歌うということに注目したい。郎女も戻ってくるのを、その場所で待つ立場の女として歌っている。二首目は、家持に対しての心情を恋歌の表現に託しているが、一首めの歌では、自らの祈る様子を具体的に歌うのである。

そして、続けて坂上郎女は、また二首贈っている。

⑥旅に去にし君しも継ぎて夢に見ゆ吾が片恋の繁ければかも
⑦道の中国つ御神は旅行きも為知らぬ君を恵みたまはな

十七―三九二九～三〇

次の二首においても一首目は恋歌の形式で家持への思いを歌うが、二首目においては、家持と関わる神に対して歌われている。この歌は、氏神にではなく、旅の途中の「道の中」の「国つみ神」に対してである。さらに、坂上郎女と家持は、実体として、坂上郎女が養育をしたということが考えられているが、ここで、坂上郎女という女性の立場を見るとやはり「大伴」にとっては、中心的な女であり、その女が歌表現で「神」に祈るということがなされているのである。そして、それは言い換えれば、待つ女たちは、男がそこからいなくなることで、その場を明らかにするということになろう。この歌の中で光明子は、藤原の女として、都にある氏神の前で、一族の男がこの都に無事にもどることを祈るのである。歌の中で女、光明子は、都にいつつ、旅に出た男が、都にもどってくることを待つのである。

そのような歌に対して大使、清河は、次のように歌っている。

⑧春日野に斎く三諸の梅の花栄えてあり待て還り来るまで

十九―四二四一

清河は、今、美しく咲いている梅の花に焦点をあて、それが、咲き続けて欲しいと歌う。梅が美しく咲き誇っているこの状態が続くこと、それは、旅立つ清河にとって、自らがもどる場所が栄えていることに他ならないだろう。彼は、「春日野」のある場所に戻ることを願う歌で答えたということになる。この歌のありかたからは、藤原家の女としての光明子の部分が強調されているということが言えるのではないだろうか。

三

次の②の歌は、「右の一首の歌、吉野の宮に幸しし時に藤原皇后の作らせるなり。ただし年月、未だ審詳かならず。十月五日、河辺朝臣東人が伝誦せるなりとて云ふ。」という左註があるものの、先にのべたようにその年代は明らかではない。歌の表現する季節を見ていこう。この歌では、「萩」と「雁」が秋の景物としてうたわれてはいるが、その二者は同じ秋のものであっても、必ずしも同時にとらえられ

るものとして歌われてはいない。万葉集において取り合わせとしては、次のような歌い方である。

⑨さ雄鹿の心相思ふ秋萩の時雨の降るに散らくし惜しも　十―二〇九四

⑩君に恋ひうらぶれ居れば敷きの野の秋萩凌ぎさ男鹿鳴くも　十―二一四三～四

⑪雁来れば萩は散りぬとさ男鹿の鳴くなる声もうらぶれにけり　十―二〇九七

⑫雁がねの来鳴かむ日まで見つつあらむこの萩原に雨な降りそね　十―二〇九七

例にあげた歌からも明らかなように、「萩」と「雁」とは、同時にあるものとしては歌われてはいない。⑨の歌は「花を詠める」、⑩、⑪の歌は「鹿鳴を詠める」に入れられているものであり、それぞれ秋の歌に属する物であるが、萩と同時に歌われる生物は、「鹿」というのが、歌の表現世界での取り合わせである。⑨では「さ男鹿」が心から慕う花としての萩と歌われ、単なる景物以上の結びつきをみようとする表現といえる。そして二つの取り合わせは⑩では、自らの思いのつらさを助長する景として心象風景と重なっていくのであろう。だからこそ、⑪のように、たとえ、同時に歌われたとしても雁の訪れによって萩は散る時期となり、そのために、萩を慕う鹿の声が「うらぶれ」るとなるのであり⑫の歌では、雁の訪れは見たい花である萩が景から消えることを意味していよう。このように同じ歌の中にある時は、季節の推移を表すものということになる。

光明子のような歌のありかたは多いものではなく、他には、次の一例のみである。

⑬雲の上に鳴きつる雁の寒きなへ萩の下葉はもみちぬるかも　八―一五七五

この歌は、「右大臣橘家の宴せる歌七首」[注12]とあるうちの一首であり、この前にある「雲の上に鳴くなる雁の遠けれど君に逢はむとた廻り来つ（一五七四）」と同じ作者で当日の主賓[注13]のものとされている。どちらも、時代は新しく、奈良の都でのものであり、季節が強く意識され、微妙な変化がとらえられてきたものといってもよいであろう。光明子の歌にもそれがあらわれているのであれば、光明子も時代の歌の共通理解の中での歌表現をしているというべきであり、伝統的なもののみでなく、新しい季節観のもとで歌ったということが考えられる。こうしたことをふまえて、更に見ていった時、考えなければならないのは、ここで、歌の女は、その細やかな季節観を「我がやど」でとらえているという歌の「場」であろう。左註から読む限りでは、光明子が聖武と共に吉野に行幸したかどうかは明らかにはできないが、歌われているのは、「我がやど」なのである。それは、共に行幸していたとしても、光明子の視線は「我がやど」にしかなかったということに他ならない。都とはちがう吉野の景物がひろがったとしても、歌われる自然は吉野ではなく、見慣れた都のものでしかなく、聖武のみが吉野にいるとしたなら、光明子は、ひとり奈良の都の季節をとらえていたということになろう。この時、光明子が吉野に贈ったという歌は、万葉集にはなく、二人の行動は推測の域を出ないが、どうであったとしても、光明子にとって「吉野」という場は歌うべきものとしてはとらえられていなかったということだけは確かなことであろう。

四

作られた時代が明らかではない③の歌については、従来、光明子の

人となりや聖武への愛情を論じる時にあげられるものであろう。歌の内容は非常にはっきりしており、理解しやすいものではあるが、そうであるために、かえって、この歌の表現内容があきらかになってはいないのではないだろうか。

ここでは、「二人」で「雪」をみたら「嬉し」いであろう、と仮定している。今自分がとらえているものを、そばにいない、相手との「二人」で共にとらえたいという希求は、明らかなものではあるものの、歌表現では、そう多いものではない。

⑭児らしあれば二人聞かむを沖つ渚に鳴くなる鶴の暁の声
六―一〇〇〇

⑮我が背子と二人し居らば山高み里には月は照らずともよし
六―一〇三九

⑭は天平六年（七三四）春三月に、難波宮に幸せる時の歌六首の中の一首で作者は守部王。

今、耳にしている「沖つ渚」で鳴く「鶴の暁の声」に作者は、心引かれるがそれは、一人でなく、思う相手と聞きたいというのである。特定の誰でなく「児」として、女性であることを示すが、旅先でのこの特別な声こそは、誰か女性と「二人」できくべきものとしているのである。今、声を聞いているのは一人でないとしても、恋の相手と聞きたいという願望を持つ「二人」という言葉であることは明らかであろう。次の⑮は天平十五年に久邇京での高丘河内連[注14]の作である。この歌の前には同作者の「故郷は遠くもあらず一重山越ゆるがからに思ひそあが為し　一〇三八」があるように、久邇京は直線距離では近いものの奈良から離れていることに変わりはなく、隔てていることの象徴が奈良山の存在であろう。そして、奈良との隔たりとは愛しい人との隔たりに他ならず、取り巻く景物もそれによって変化してしまうものとなる。ここで、高丘河内連は久邇の心なじまない景、月さえも照らない景を嘆いているが、それをすべて解消してしまう存在こそが「我が背子」であり、その人物と「二人」でいるという状態と歌う。男性の官人である高丘河内連が「背子」と歌うのは、この歌が宴席での作であることによるが、この歌の表現で「背子」を求め、その相手と「二人」であれば、この心にかなわない景も「よし」と歌いきるのは、「二人」という状態が望むべき形として意識されていることに他ならない。光明子以外の二例とも比較的新しいもので同時代のものといえる。そのため光明子はこの「二人」と同じ意図をもっていたと考えられるはずであろう。

歌の表現を時代の中で考える限り、この歌の表現は単に恋しく思う相手に向かって「二人」でいたいと歌いかけるのではなく「二人」という状態こそが求められているといってもよいのではないだろうか。つとに『万葉集評釈[注15]』で「『ふたり』と数へた処に幾許かの怨意が隠然としてゐる」としているように確かに、あえて「二人」という表現を求めたのは、そこに二人が並ぶという男女の姿を理想としていたからに他ならない。そして、表現の上で明らかなことは、歌の女としての光明子のもとに、求めるべき男、聖武はいないということなのである。

今、自分のいる場所と相手のいる場所とに物理的な距離があり、その距離故に隔たっている「二人」と歌う光明子にとって、今、いない夫聖武がいるのは本来の場所ではなく、自らがいる場所こそが「二人」でいる場所であったといえよう。『続日本紀』には光明子と聖武が行動を共にしたという記事が大仏開眼までみられない[注16]が、こうした実体は、光明子の歌とも関わっているはずである。

このように素直な心情が歌われているとされてきた光明子の歌は、女性の素直な心情を相手に読ませるべく意図された歌に他ならない。言い換えれば、皇后が目の前にいない天皇聖武を思い、自らのそばへ

戻るのを待つ女の恋歌となるのである。さらにここで、考えておかねばならないことは、この③の歌に聖武への思いが歌われているものの聖武と光明子の間には贈答がないということである。聖武の恋歌は皇族の女性のみに贈られているのである。[注17] これは、聖武にとっての歌の場、特に恋歌のあり方ともかかわっていたものと考えられるが、[注18] ここで確かめておきたいのは、実体としての恋歌の有無はおくとしても、光明子は聖武の恋歌の文化圏には入っていなかったということなのである。歌の世界で光明子、聖武は男女として、大きく隔たっていたというべきであろう。

以上のように私的な歌の場を見てきたが、その一方で、彼らは両者ともに公的な文化圏をもち、それぞれの存在をそこに位置付けていたことは、明らかなことであり、聖武の場合は『続日本紀』に多くの場を見ることができる。光明子の場合、『続日本紀』にはそれは見いだせないが万葉集は次のような左注を残している「仏前の唱歌」という題詞で作者は不明とされるものの「時雨の雨間無くな降りそ紅ににほへる山の散らまく惜しも　八―一五九四」という歌につけられているものである。

右は冬十月の皇后宮の維摩講に、終日に大唐、高麗等の種々の音楽を供養し、爾して乃ちこの歌詞を唱ふ。弾琴は市原王。忍坂王。歌子は田口朝臣家守・河辺朝臣東人・置始連長谷等十数人なり。

これは、鎌足が始めたとされる維摩講を天平十一年（七三九）に光明子の皇后宮で行った時のものであるが、この記述について、藤原茂樹氏は「氏族の会でありながら、皇后宮での催しであり、外来楽や多数の藤原氏以外の貴族が楽人・歌人として参与していることは、そのありようが准公的な催しとなっていたことが考えられる」[注19]とし、さらにこの催しが「宮廷の祭儀に見劣りしない皇后宮の勢威を示している表現」と述べている。この維摩講で歌われているもののなかに、外来のものとともに万葉集にのせられている作者未詳の歌があることは、歌に文化的な位置を与えていたことであり、光明子にとっても歌が大きな意味をもっていたことは明らかであろう。こうして、私的にも公的にも歌の文化を持っていた聖武、光明子であるがそれぞれの歌の世界に決して相手がはいることはなかったといえよう。いいかえれば、聖武と光明子は、それぞれに相容れない文化圏をもっていたのであった。こうした歌のありかたのなかでの光明子の歌は何をあらわしているのだろうか。

そのあり方を考える時、万葉集では光明子の歌は立后以前のものがないということが注目される。ことばを変えて言えば、藤原氏の出身である光明子は、聖武の后になって歌の世界に登場してくるのである。万葉集に残されているもの以外にも実際には光明子は歌を残しているという推測は可能であるものの、今、残されている万葉集の歌では、「皇后」としての光明子に他ならない。そして、それらの歌は藤原の一族を強く意識した表現を持ち、都での女の立場をとるという女の歌表現である限り、万葉集の光明子は藤原氏との強い関わりを持つ都の女という姿を残しているというべきであろう。

五

藤原広嗣の乱以後、聖武は都を移していく。『続日本紀』には、その聖武に寄り添って行動する皇后、光明子の存在をみることはできない。今、光明子の残された歌からは天皇のいる場所を都として共に存在する皇后ではなく、平城京という都市の中に存在する歌の女を見るのみなのである。光明子は多くの反対を押し切り、天皇と共に政治の場に存在する皇后として求められてはいたものの、歌の世界では、決して、共通の空間をもちえていなかったのである。それは、歌の上で

はっきりとした方向性によるが、このあり方こそが藤原氏の女としての光明子を位置づけ、歌表現のなかで理想的な女としてよみとることを求めていくものではなかったのだろうか。歌で光明子は都の女として、あくまで聖武を求めつづけている。この姿は、藤原氏の求めた聖武ではなかったのだろうか。光明子は歌の中で藤原の女でありつづけたのであった。

注

①天平元年八月二十四日の宣命に次のような部分がある。
・・・天下の君と坐して年の緒長く皇后坐さぬ事も、一つの善くあらぬ行に在り。また、天下の政におきて、独知るべき物にもあらず。必ずもしりへの政有るべし。

②当時、首皇子は十六才。光明子も同じく十六才であった。その前後に妃として県犬養広刀自が入っており、彼女は翌年に井上内親王を出産している。

③天平元年八月二十四日の宣命では、元明が聖武に与えた勅として次のように表現している。
「女と云はば等しみや我がかく云ふ。其の父と侍る大臣の、皇我朝を助け奉り輔け奉りて、頂き恐み供へ奉りつつ、夜半、暁時と休息ふこと無く、浄き明き心を持ちて、ははとひ供へ奉るを見し賜へば、其の人のうむがしき事款き事を送に得忘れじ。我が児我が王、過ち無く罪無く有らば、捨てますな、忘れますな」と負せ賜ひ宣ひし大命に依りて、かにかくに年の六年を試み賜ひ使ひ賜ひて、この皇后の位を授け賜ふ。然るも、朕が時のみには有らず。難波の高津宮に御宇大鷦鷯天皇、葛城曾豆比古が女伊波乃比売命皇后と御相坐して、食国天下の政を治め賜ひ行ひ賜ひけり。今、めづらかに新しき政には有らず。本ゆり行ひ来し迹事そと詔りたまふ勅、聞きたまへと宣る。

④天平元年（七二九）二月から天平感宝元年（七四九）六月まで二十五年四ヶ月にわたる。

⑤たびたび、曲水の宴で賦を作らせているほか、神亀三年には「玉棗」を見て賦をつくらせ、また七夕、梅樹などの題を与えて、宴の出席者に賦をつくらせている。

⑥「共有される心」『別府大学紀要』四十四号

⑦巻八―一六一四・五の贈答

⑧大使が藤原清河。他に大伴古麿・吉備真備・大伴御笠・巨万大山・布勢人主らが渡っている。

⑨大伴坂上郎女の「祭神歌」は以下の通りである。
ひさかたの　天の原より　生れ来たる　神の命　奥山の　賢木の枝に　白香つけ　木綿とり付けて　斎瓮を　斎ひほりすゑ　竹玉を繁に貫き垂れ　鹿猪しもの　膝折り伏し　手弱女の　おすひ取り懸け　かくだにも　われは祈ひなむ　君に逢はじかも（三七九）
反歌
木綿畳手に取り持ちてかくだにもわれは祈ひなむ君に逢はぬかも（三八〇）
右の歌は、天平五年の冬十一月を以ちて、大伴の氏の神に供へ祭る時に聊かこの歌を作れり。故に神を祭る歌といふ。

⑩「侵略する恋歌」『万葉の歌人と作品』第十巻に収録。

⑪天平十八年（七四六）閏七月、家持の越中守赴任時に歌っている。

⑫天平十年（七三八）八月二十日に山城国綴喜郡井手の地にあった邸で行われたもので同日の作品が巻六―一〇二四～七にも残されている。

⑬万葉集では、このあとに「右二首」とだけあり、作者名が漏失している。

⑭皇太子時代の聖武に侍講。天平十四年には紫香楽造宮輔となっている。歌は万葉集ではこの二首のみである。

⑮金子元臣『万葉集評釈』の一六五八の項

⑯天平十八年（七四六）十月六日に太上天皇とともに聖武、光明子は金鐘寺に行幸し、廬舎那仏を燃灯供養したという記事をみることができる。

⑰瀧浪貞子氏はこれらの贈答歌に聖武と皇族の女性との愛情を読みとり、海上皇女と聖武の歌には「深い関係が思われる」とされ、「光明子をはじめ正式に入内したキサキが民間人であったのに対して」こうして歌を交わした女性が皇族であったことから「藤原氏の抱く政治的思惑に逆らう聖武の個人的な資質」をみてとっている。『帝王聖武』講談社選書メチエ

⑱　元正の時代からの歌のあり方、女性の歌の存在については、別稿を準備している。

⑲「天平の芸能―女舞と大仏開眼会と―」『天平万葉論』翰林書房